神事・仏事と曲物

——曲物の民具学的研究の断章——

岩井　宏實

はじめに
1. 神器・祭具としての曲物
2. 神饌容器から見る曲物の変遷
3. 仏教儀礼と曲物
おわりに

論文要旨

曲物は，刳物・挽物・指物（組物）・結物などとともに木製容器の一種類であるが，その用途はきわめて広く，衣・食・住から生業・運搬はもちろんのこと，人生儀礼から信仰生活にまでおよび，生活全般にわたって多用されてきた。そして，円形曲物・楕円形曲物は，飛鳥・藤原の時代にすでに大小さまざまのものが多く用いられ，奈良時代には方形・長方形のものがあらわれ，古代において広くその使用例を見ることができる。

今日広く普及している桶・樽などの結物は，鎌倉時代後期から室町時代初期にその姿を見せるが，実際に庶民の日常生活に広く用いられるようになったのは，近世になってからである。したがって，それ以前は桶といえばすべて曲物であった。

こうした曲物は神事・仏事にも多く用いられており，神具でいえば御樋代・奉納鏡筥・火桶・忌桶・三方・折敷・折櫃・行器その他さまざまな形状の神饌容器がある。また仏具では経筒内容器・布薩盥・閼伽桶・浄菜盆あるいは各種仏具容器として用いられている。神事や仏事は古風を尊び，できるだけ原初の姿を伝承しようとする風があるゆえ，それに用いる神具・祭具や仏具も古い用法や形状を伝えているものが多い。

そこでそうした現行顕在曲物を検討していくとともに，出土遺物や文献資料あるいは絵巻物などの絵画資料をあわせて考察すると，曲物の様式的変遷も明らかになってくる。その結果，曲物のはじめは底板が固定されたものではなく，平らな板の上に側板を載せただけのもので，つぎに底板を側板の口径より大きく切り，随所に孔をあけて紐や樹皮で側板を底板に綴じつけたものになり，さらに底板に側の内径にあたる部分を厚くし，側板の接する部分から外側を薄くし，底板に側板がよく納まるようにしたカキイレゾコに似た仕様のものへとかわり，そこから漸次進歩して今日見るかたちになる過程を知ることができる。

はじめに

木の民具のうち容器として用いられるものは，その製作手法からみて五種類ある。第一に木を手斧などで刳って作った槽・臼・木鉢・木皿・盆・杓子などのいわゆる「刳物」。第二に刳物の手法を一層発展させて轆轤で挽いて作る椀・小皿・木地膳・丸盆・茶櫃などの「挽物」。第三に桧や杉などの薄板を曲げて，桜の皮で綴じ合わせ，それに底板をはめ込んで容器とする「曲物」。第四に板を組み立てて枘差しで接合した箱などの「指物（組物）」。第五に板を円筒形に並べて箍で締め，底板をはめ込んだ桶，さらに蓋板を固定した樽などの「結物」がある。

これらの中で曲物の用途はきわめて広く，衣・食・住から生業・運搬はもちろんのこと，人生儀礼から信仰生活にまでおよび，生活全般にわたって多用されてきた。そこで木の民具，ことに曲物についてかねてより関心をいだき，民具としての曲物についての総括的な序論ともいうべきもの[1]，またその用途についての概要[2]，さらに衣生活と曲物[3]，食生活と曲物[4]，運搬具としての曲物[5]，人生儀礼あるいは信仰生活と曲物[6]，あるいは茶の湯と曲物[7]などについてすでに発表してきたところであるが，ここに神事・仏事にいかに曲物が用いられてきたかを考察し，さらにその形態・仕様・意匠などから，その様式的変遷を明らかにしようとするものである。なおそれには現行顕在民具としての曲物だけでなく，出土遺物や文献資料・絵画資料など各形態の資料を総合的に用いることに心がけた。

1.　神器・祭具としての曲物

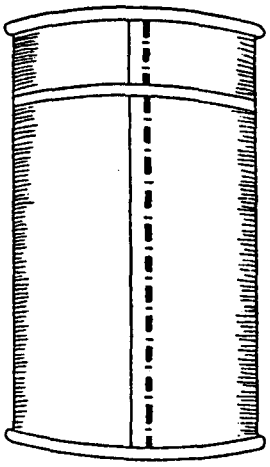

図1　御樋代

曲物の神器・祭具は数多いが，なかでももっとも重要なのは「御樋代（みひしろ）」である。それは御神体を納めるもっとも神聖な容器で，伊勢の皇太神宮では御神鏡を納め，奉安して神座に置く器である。『皇大神宮儀式解』には，

> 御樋代は美比志呂とよむべし。御正体をひめ奉る具也。（中略）新宮を作り奉る時，此の樋代を作り替へ奉るは，代代の遷宮記に見え，今の世もたがはず。此外黄金の御樋代あり，重重口伝ありといへり

とあり[8]，式年遷宮ごとに御樋代が新造され，江戸時代には黄金製の御樋代もあったようだが，多くは木製の御樋代を新造したらしい。『延喜大神宮式』には「大神宮樋代一具，正宮料，高二尺一寸，深一尺四寸，内径一尺六寸三分，外径二尺」とし[9]，

写真1　熱田神宮奉納鏡筥　天正16年銘

『皇太神宮儀式帳』には「御樋代一具，深一尺四寸，内八寸三分，径二尺，内一尺六寸三分」と記しているが[10]，それは側板の厚い円筒形の曲物容器で，本山桂川著の『日本民俗図誌』第一冊祭礼篇によると，身の深さの五分の一ぐらいの深さの蓋がついていて，蓋の口径は身の口径と同じで，身にかぶせるのではなく，身にのせるかたちになっている。もちろん中にもう一つ曲物の側板が上部についていて，蓋がそれをかぶせて納まるようになっている[11]。この御樋代の用材を伐材するにあたっては，おごそかな御杣山木本祭・御樋代木奉曳式が営まれたのである。御樋代はさらに木製の筥に納められるが，その容器を御船代といい，御船代の用材の伐材についても，御船代祭が厳粛に営まれる。

かように，鏡は日常用具としてよりも，本来は祭祀用具として用いられたのであった。鏡そのものの出現は，日本においては紀元前1，2世紀の頃とされている。そしてそれは鏡面反射に対する恐畏と同時に，円形で太陽光線を反射して，第二の太陽ともいうべき輝きをもつことから，神の依代，あるいは一種の呪術具として神秘的な扱いを受けたのであった。日本神話の中に八咫鏡の名で登場する太陽神の象徴としての霊鏡の物語でもそのことは明らかである。こうした鏡にたいする神聖観はのちのちまでも伝わり，各地神社の神体や，神前の飾り鏡として広く用いられている。そのため，神への祈願や報謝のために鏡を奉納する風習も広くおこなわれた。そのさい鏡を納める鏡筥また多く曲物容器が用いられたのであった。

名古屋市熱田区神宮に鎮座する熱田神宮は，伊勢神宮とともに神宮号を称する格式高い神社であるが，ここに奉納された鏡は平安時代から江戸時代の柄鏡まで160余面に上る。その大部分が室町時代の製作にかかるものであるが，「奉施入　熱田大神宮　大宮司刑部少輔満範　応永十九年二月二日」在銘の蓬萊文鏡をはじめ優品がきわめて多く，和鏡の変遷過程を知る上でも貴重な資料である。これらは曲物の鏡筥に納められていたので，曲物鏡筥も数多く伝えられている。だが奉納鏡があまりにも多く，またなかには散逸した鏡筥があるようで，すべてが鏡と一致するものではない。だが鏡の銘文と鏡筥の銘文の一致するものもあり，その代表的なものとして天正16年（1588）銘の蓬萊文鏡がある。この鏡筥の蓋上面には，

天正十六戊子年

為逆修善根鏡一面

奉寄進處也

　　玉林窓秋

七月七日

の墨書銘がある。このほか残存する曲物鏡筥の蓋上面には多く墨書銘があり，その年紀と願主の願意のほどがうかがえる。

なお，奈良県五条市御山町宮山の火雷神社に，円筒形の曲物の忌桶が伝えられている。これは行器の底のように，板を十文字に組み合わせた四脚がついている。この忌桶には「御山村若宮大明神」の墨書銘があり，さらに享保7年（1722）5月権大僧都法印玄公，宝暦4年（1745）4月権大僧都法印豊水の奉仕によって遷宮のおこなわれたことが記されている。火雷神社はかつて「御山村の若宮大明神」と称されて，近在近郷の信仰をあつめていた。この曲物忌桶はこうした遷宮に用いられた神具であったらしい。

神事には，いまも古式にのっとって火鑽杵・火鑽臼をもって発火し，その火種をもって神殿内各所に点燈されるのであるが，発火した浄火を火口に移して持ち運ぶさい，曲物桶が用いられる。一般に火桶と称しているが，蓋がついていて，その中央に通風のための丸い穴があいている。そして桧の細長い薄板を曲げて把手（提手）とし，その両端を側板にとりつけ，持ち運びできるようにしている。伊勢神宮では毎朝浄火が発火され，この火桶はつねに用いられている。地方の神社においても，浄火を運ぶときはこの火桶を用いている。

また，こうした火桶を用いず，曲物の側板だけをもってする場合もある。京都の北野神社の梅花祭に，神饌を調製する火の火種を運ぶのに，三方の上に曲物の側板をおき，その上に円形の板をのせ，さらにその上に曲物の側板をおき，その中に素焼の油皿に火のついた灯心をのせて入れ，いちばん上の曲物の側板で風を遮って運ばれる。これほどていねいにせずとも，火種が風で消えぬようにするため，曲物の側板をかぶせることは，平素もおこなわれたようである。

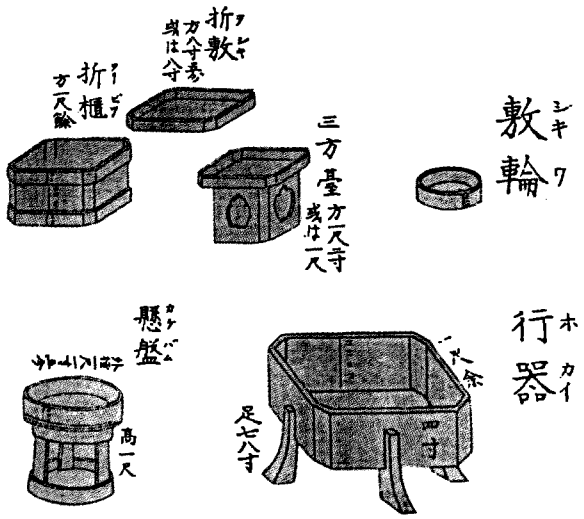

図2　神饌容器各種

神事の中心である神饌調進にあたって，その神饌を盛ったり，納めたりする容器は，素焼の土器皿・碗・鉢・高坏，あるいは木製の盆・椀・高杯や盤，また折敷・三方・桶・櫃などさまざま見られるが，そのなかで注目されるのは，木製の曲物容器の多いことである。もちろん円型曲物だけでなく，側板の4カ所を曲げて方形・長方形にしたものも含めてである。

そのなかで，もっとも普遍的に用いられているのが三方である。

方形の折敷を桧の白木で作り，三方に孔のあいた台にのせたもので，古代には食事をする台に用いたのであった。神饌そのものが，人間の生活にもっとも恵をいただいた食物を，おいしく調理し，きれいに盛りつけて神に捧げるものであるから，そうした食物を食べる台として，重宝した三方を神饌調進の台，容器としたのは当然であった。

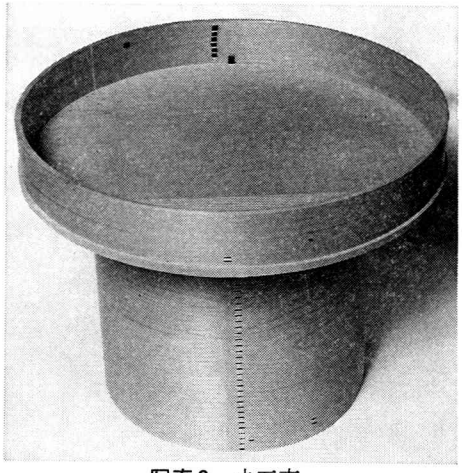

写真2　丸三方

この三方は，『神道名目類聚抄』は「四方三方　御饌ヲ供ズル御膳ナリ」とし，「コノ穴クリカタ，四方ニアキタルヲ四方ト云フ，三方ニアキタルヲ三方ト云フ」と説明しており[12]，『貞丈雑記』も，

一ついがさねとは，衝重と書て，三方，四方，供饗の総名なら，皆ついがさね也，上の台と下の足とをつきかさねたる物なる故，ついがさねと云なり，三方に穴をあけたるを三方と云，四方に穴をあけたるを四方と云，穴を一ツもあけざるを供饗といふ，此三品は何れも同じ形なり，

としている[13]。形としては方形の折敷の下に台のついたものである。これに神饌を盛って神前に据えるとき，上の折敷の方は，側板の綴目のない方を神前に向け，台の方は孔のない方を神前に向ける。したがって，台は側板の綴目のある方が神前に向くことになる。

なお，伊勢神宮では神楽殿において丸三方というのを用いている。それは浅い盆形の曲物に，円筒形の曲物の台をつけたものである。丸三方は角三方とちがって台に孔はない。孔のないところからいえば，『貞丈雑記』にいう供饗と考えてよいのかも知れない。この丸三方は，今日多くは上下接着しているが，それも三方を神前に据えるときと同じように，側板の綴目の位置は，上部の盆の部分と下部の台とは逆の位置についていて，上部が綴目のない方を神前に向けると，下部は綴目のある方が神前に向くようになっている。

ところで，三方の台の部分のもとの機能と同じく，神饌容器の器台として曲物を用いる例もきわめて多い。大阪市福島区の海老江八阪神社の御饗神事には，菊花のキヨウ・イナナマス・イナズシなど，数々の神饌を素焼の皿に盛って神前に供されるが，そのさい皿の器台は曲物を用いている。京都市右京区の松尾大社の還幸祭にも，西寺公園の御旅所にたくさんの種類の神饌が供されるが，これも神饌を盛った素焼の皿の器台は，大小さまざまの皿に合わせた大きさの曲物である。ほかに，京都市右京区の北野神社の梅花祭，大津市山中の樹下神社の御膳持ち神事など，みな素焼土器皿を曲物にのせて神膳に供するし，こうした例は枚挙にいとまがない。

要するに三方というのは，曲物器台と折敷を組み合わせたものである。むしろ折敷が主体で

写真3　伏見稲荷神社菜の花祭りの神饌

ある。そのため折敷だけが独自に多様な用途をもって機能したのであった。この折敷が神饌容器として長く用いられたのであるが，その当初においては，日常食膳用具と神饌容器と明確な区別はなかったようである。後世，日常食膳用具に種々の材質・形態のものが現われ，日常的に重宝されるようになると，折敷は日常生活においても用いられるが，多く神事をはじめとする儀礼に使用されることが主になり，一定の仕様が生まれてくるようである。『延喜式』では造酒司式の園韓神祭料として「細布二尺酒台二具折敷料調布三丈六尺一丈四尺缶七口覆料別二尺二丈二尺机二前覆料折敷料」と，細布・調布が折敷料として記載されているが[14]，折敷に布が敷かれたのは儀式用であろう。平安時代にはいろいろの呼名の折敷があったが，『江家次第』巻二十にいう「絹折敷」[15]も，『延喜式』に記されたところの細布・調布用法と同様に絹を折敷に敷いたものであろう。鎌倉時代になった『世俗立要集』では「美麗ノトキハ面バカリ「ニ」白平キヌヲヲス」と説明しており[16]，折敷に絹を敷く用例をあげている。ほかに羅を張ることもあった例が『御堂関白日記』上に見える[17]。また『世俗立要集』に「面折敷長九寸弘八寸スベテゴフンヲヌリテ，ウツシノハナヲモテ，トヲヤマヲカク」と胡粉彩色した折敷のことを記している[18]。『政事要略』巻22にいう「絵折敷」[19]もこの範疇に入るもので，儀礼用折敷と考えられる。こうした意匠から宮廷儀礼や神仏祭事に用いられる折敷に，漆塗・朱漆塗のものが生まれてくるのであろう。とくに寺院に伝来する折敷の多くは朱漆塗である。

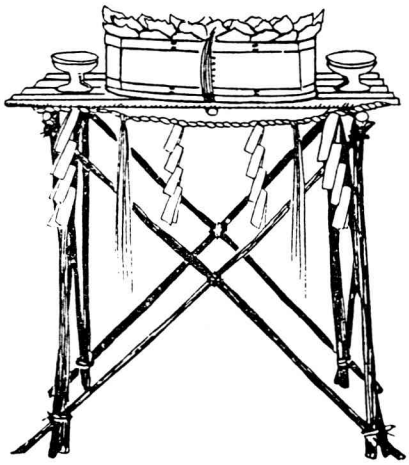

図3　率川神社三枝祭りの御棚神饌

こうした折敷のさらに深くなったのが折櫃である。一般に折櫃は櫃といわれるように，折敷が敷で物を載せる形が主であるのにたいして，折櫃の方は物を入れるということが主になる。したがって形も折敷よりも深く大型になる。そのため補強のために側板の上下に廻しの側板の

つくことが多い。いずれにしても神饌供進の容器として，曲物が多く用いられたことは事実である。

神饌の容器として曲物が用いられた様子は，『年中行事絵巻』鷹司本第1巻第2段の饗饌をつくる場に見られる。大きな長方形の6脚付の櫃の中に，神饌を容れた方形曲物や円形曲物を入れる場面がある。また向うでは，円錐形の御供を調製しているが，その円形の桶も，廻しの側板を上中下と3段に廻し，なお縦に何か所か補強のための板を入れた曲物である。またすでに調製した御供を容れているのも浅い曲物である。この方は下だけ廻しの側板が入っている。それぞれの大きさや深い浅いによって，おのおのに適した補強の策を講じた仕様の曲物がつくられ，そうしたものが神饌調製用具あるいは神饌の容器として用いられていたのであった。

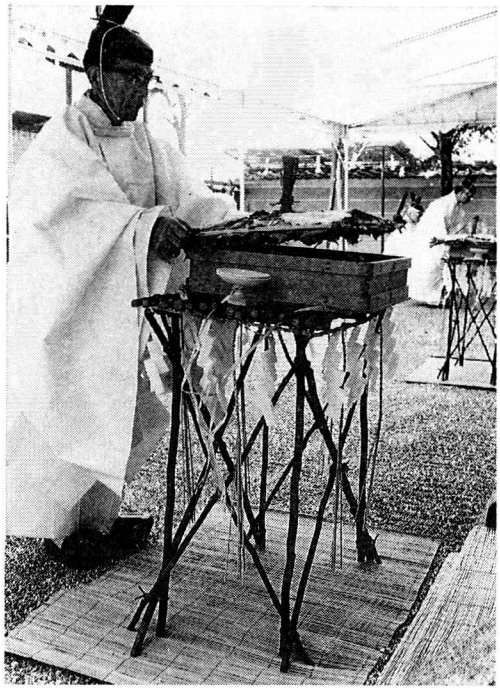

写真4　率川神社三枝祭りの御棚神饌献供

神饌献供にはまた行器も用いられた。もともと行器のホカヒはホカフの変化で，のちに祝福の意となり，門口で祝言をのべる門付芸人や乞食の徒も「ほかひ人」と呼ばれるようになるが，本来は神仏に供物を捧げることがホカフであり，その供物がホカヒであった。だからホカヒは神仏の供物を入れる容器であった。だがのちに神仏に供える食物を入れるものだけでなく，祝福事のときに贈る食物を入れるものにも用いられるようになった。

奈良県五条市霊安寺町宮崎の御霊神社の神宝のなかにも，曲物行器が伝えられている。高さ24.8センチ，口径44.8センチで，底には

御供櫃奉施入　宇智郡本宮

応永十九壬辰林鐘朔日　願主祐栄敬白

の墨書銘がある。応永19年（1412）の曲物容器が完形で今日に伝わるというのは，神事のさいのみに用いられ，重要な神具として保存されてきたためであろう。なおその使用については，御供所すなわち神饌調製所から，調製された神饌を神前に運ぶためだけのものであったか，またそのまま奉献したのか詳かではないが，墨書銘によっても，御供櫃すなわち神饌容器であったことは明らかである。

2.　神饌容器から見る曲物の変遷

神事は慣習的に古風を継承踏襲する性格をもっている。すなわち日常生活においてすたれていった習俗も，ハレの日だけ本来の姿をとどめ，神事・祭事において継承されることが多い。したがって，神事・祭事の儀礼用具も古風を踏襲し，新調するさいにも古式を模倣する例が多い。そうした，いま主として神事や仏事に用いられている三方や折敷・折櫃なども，出土遺物の例などを見ても，もとは常食膳用具として用いられていたと思われるが，各種各様の食膳用具が考案され使用されるにしたがって，しだいに神事・祭事・仏事にだけ用いられるようになっている。そうした点から見て，折敷・折櫃を中心に神事儀礼での使用の仕方，またその形状・仕様などを比較検討することによって，容器としての曲物の変遷を明らかにすることができると考えられる。

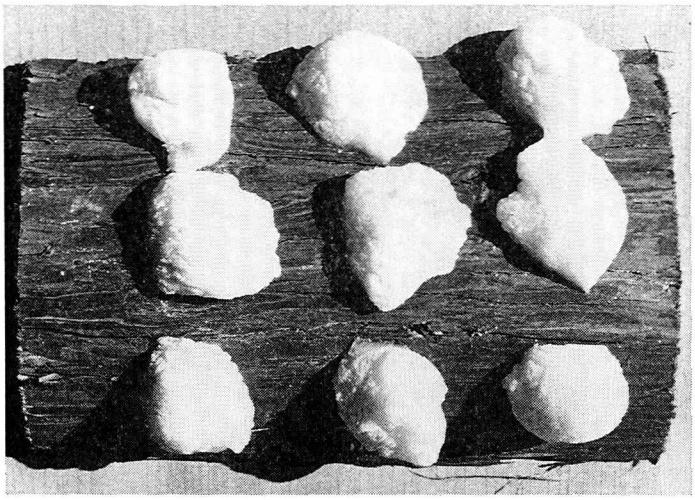

写真5　倭恩知神社シンカン祭りの杉皮御供

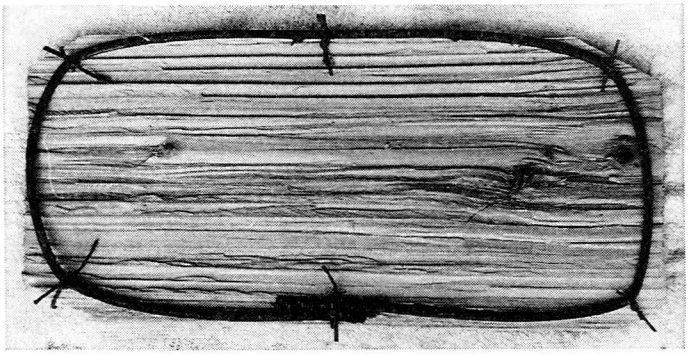

写真6　河内神社秋祭りの頭の神の膳（杉板御膳）

神饌の調進に曲物が多く用いられたには，意味があったのである。大きな神社にはしばしば神饌殿・御供屋などと称して，調理所としての特別の建物をもっているのは，そこで真新しい食物を調理して，もっとも新鮮な神饌を調製したのであった。そのさい，神饌の容器も新しく調えられ，そのときかぎりに用いられたのであった。そのことは今日も随所に見受けられる。

天理市海知町の倭恩知神社のシンカン祭りの神饌のうち，花御供を「杉皮御供」といい，杉の板の上にのせる。長さ15センチぐらいの杉の丸太の端を，幅10センチぐらいに縦に割った皮の

ついたままの板に，小さな白餅9つをのせるのである。この板は，祭りの前々日神饌調製のさい，頭屋の手によって作られる。兵庫県揖保郡新宮町牧の河内神社の秋祭りの頭には，神饌調製のさい杉の木を縦に割って長方形の板を作る。それは鉈だけを用いて作るもので，板に割り上げると鉈で隅切りをし，板の周辺の少し内側に，山の蔦の蔓をのせ，その蔓と板とを6カ所細い蔓でとめる。この御供膳は，さきの海知の花御供の板より一段進んだ形で，また，この形がおそらく折敷の最初の姿ではなかったかと思われる。

浜松市の伊場遺跡からは，たくさんの曲物が出土していて[20]，円形曲物はすでに古墳時代の7世紀中葉のものがあるが，方形・長方形・楕円形曲物が奈良時代の8世紀前半と，平安時代の9世紀から10世紀にかけて多く出土している。ここで楕円形曲物といっても，まったく楕円形のものと，長方形にちかく，長方形の板の隅を丸く落したものとある。ここで後者のものは長方形曲物と同じに考えてよい。この方形・長方形曲物は，長辺65.3センチの大型から，19.7センチの小型のものまでさまざまあるが，なかに，側板の下端部が4隅と長辺の中間の6カ所，樺皮で固定された状態のものがある。それは長辺40.3センチ，短辺27.9センチ，底板の厚さ0.9センチ糎の大きさで，側板はごく浅く，高さ2糎で，底板の周縁よりも内側にとりつけられ，なお側板が動かぬように，カキイレゾコ形式にしている。こうした事例を見ると，倭恩知神社の神饌の台板から，河内神社の曲物折敷，伊場遺跡に見られるような形状の曲物折敷への変遷をうかがうことができる。

こうした形態上の変遷からみても，曲物はそのはじめ，荒削り・荒割りの板の上に，ただ曲げた側板をのせただけのものであったろうし，また特別の台板がなくとも，曲げの側板だけでも用をなしたはずである。新潟地方では，「神の膳」と呼び，長辺10センチ，短辺5センチ，厚さ1センチぐらいの長方形の板の上に，小さな浅い曲物の側を1つ乃至2つ載せただけのものが，神饌容器として用いられている。

東京都の西多摩や南多摩の地方では，折敷に小さな2つの曲物の側板をとりつけ，それを井戸神様の祭りに供える供物の容器にしている。これを俗に「眼玉」といい，歳の市に売られる。これは新潟地方の「神の膳」とまったく同じ形式である。

京都の賀茂御祖神社（下鴨神社）の御供膳も，板の上に曲物の側板だけのせたものであり，賀茂別雷神社（上加茂神社）で，蔡祭りのさい庭積神饌を盛る葉盤（ひらで）も同様の形式である。葉盤にはアザミの根，バラの新芽，ヨモギの芽，たくさんの海藻類を盛るが，これは1セ

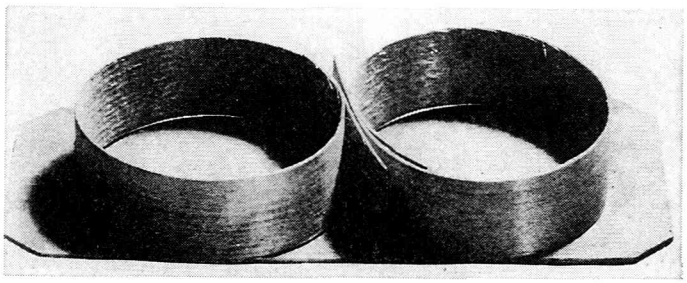

写真7　新潟地方の神の膳

ンチ弱の厚さで，一辺18.3センチの正方形の板の4隅を隅切りし，その上に内径15.3センチ，高さ1センチの曲物の側板をのせたものである。これが120個もあり，それを唐櫃に入れ本殿前の庭に供するのである。唐櫃に入れて積み重ねるときは，一重おくとその上に松の葉をのせ，またその上に葉盤を重ね，順次積み重ねていく。葉盤はいま台板（底板）と側板を接着しているが，もとはただ板の上に側板をのせただけであったらしい。

葉盤はもともと数枚の柏の葉を細い竹釘で刺しとめ，盤のようにしたもので，食器の1つとして用いられたのである。『日本書紀』巻第三神武紀には，「作二葉盤八枚一，盛レ食饗之」と，八枚の柏葉に飯を盛って八咫烏に供えたという。[21] なお，「葉盤此云二毗羅耐一」と云っており，[22] 久煩氐すなわち窪手に対する名で，浅く平な形を云っている。のちにはそうした形の土器を葉盤というようになり，枚手とも書いたようである。後世『兼葭堂雑録』は「槲御膳又は槲御供（かしはのみけ　かしはのごく）とも云」とし，[23]「槲葉にて筥の如くに折て，細き竹にて縫製す」と説明している。[24] 上加茂神社の庭積神饌はこの古風な御供を踏襲しながら，曲物曲器をもってしたものと考えられる。なお，120杯にもおよぶ庭積神饌の供えられる場所は，境内各所の古木の根方であり，そこはかつての神霊降臨の場ではなかろうかと推察されるのである。

藤原宮跡出土の折敷のなかに，隅を丸く曲げた長方形にちかい二重の側板がある。[25] これは長辺27センチ，短辺18.8センチの側板だけ単独に出土していて，2枚の側板をそれぞれ相互に廻して，短辺の中央で重ね合わせ，樺で綴じたものである。側板の高さ3センチ，厚さ0.2センチで，樺は残っていないが，長辺で4カ所，短辺で2カ所，側板を樺の皮3重に廻してとめていた痕跡がある。この痕跡が側板の上下両端にあることからみて，側板を底板に固定したものではなく，ただ板の上に側板をのせただけで，一種の折敷として用いたものと考えられる。

平城宮跡からも折敷が出土している。[26] 底板を平面にし隅丸方形のものと，隅角を削り落して楕円形にしたものとある。側板は薄いへぎ板の曲物で，側板と底板との接合は2孔1対の孔をあけて綴じている。折敷の一辺の長さは，最大41.6センチ，最小15.7センチである。

滋賀県神崎郡永源寺町君ケ畑の木地祖神社の正月のオコナイの神饌は，樽にモツソを盛ったものを中心に，その周囲に昆布・イカ・フナズシを小さく切ったのを10組置くが，それは各々半紙に包んで，曲物の側板の中に入れたものである。曲物は側板だけで底板はなく，モツソの樽といっしょに大きな盆にのせるだけである。その曲物の側板も，継ぎ目は細かく綴いたものではなく，板を曲げて両端を重ね合わせて，大きく外から縦に蔓でしばっただけで，いたって簡単な仕様である。

これをみても，はじめはただ側板だけあればそれで用が足りたようである。神饌はかりに熟饌であっても，古い調理法は煮る・炊くというよりも，蒸す・搗く・捏ねるなどの方法であったので，盛り上げたさい崩れないようにすることと，一種の枠取り，結界の役を果たせばよかったのである。したがって，かならずしも底板と密着した容器でなくてもよかったのである。

だが，漸次曲物の側板が摺り動かないように，台板なり底板となるべき板にとめるような工夫が凝らされていった。

埼玉県の江ケ崎館址で発掘された「神の膳」は，いたって小型のもので，厚さ0.5センチ，径11センチの平らな板に，口径5.6センチの側板を1つのせたもので，底板に2つ1組の孔が4カ所あり，紐を通して側板を底板に固定したもののようである。[27] こうした「神の膳」の形態と照合できるものとして，伊場遺跡出土の曲物，[28] 神奈川県下曽我遺跡出土の曲物がある。[29] 伊場遺跡では奈良時代の8世紀初頭からのもの，下曽我遺跡では奈良時代7世紀のものが多いが，伊場遺跡の円形曲物では側板がはずれて出土していて，カキイレゾコ作りの底板と，クレゾコの作りのものとあるが，概してカキイレゾコ作りの方が古い。それらは，円形の底板の周縁内側で，側板の接する部分から外側が薄くなっていて，4カ所孔があいている。それは側板の固定個所である。

下曽我遺跡の曲物は，円形の底板に側板の下縁部だけがごく狭く残っていて，側板の口径は底板の直径よりもうんと小さく，側板と底板の接合は木針で固定するのではなく，樹皮をもって数カ所綴じつけたものである。

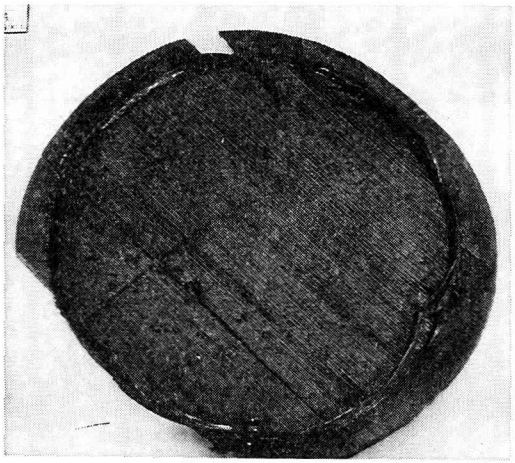

写真8　下曽我遺跡出土曲物底・側板片

ところで，大阪市西淀川区野里町の氏神，住吉神社の2月22日の例祭は，古来「野里の一夜官女」として著名であるが，この神事はフナ・コイ・ナマズ・御供物・串柿・鏡餅などを調製し，夏越桶7台に分納し，氏子中から選ばれた少女（一夜官女，一時上臈）が神に献ずるのである。この夏越桶が曲物で，側板の深さが22.8センチ，長径59センチ，短径41センチの楕円形の曲物桶である。これは元禄10年の墨書銘があり，いまも祭具として用いられ，大阪における神事の代表的な祭具の一つとして大切にされ伝えられてきた。この夏越桶も，底板が側板の中にはめこまれたものでなく，底板の方が側板の口径よりも大きく，長径68センチ，短径47センチの楕円形の板の上にや

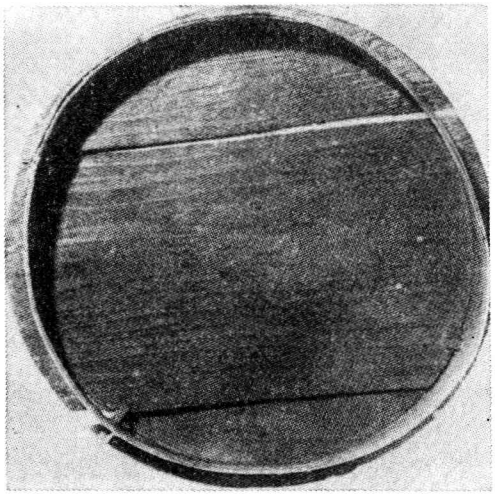

写真9　藤原宮跡出土曲物底・倒板片

写真10　野里住吉神社の夏越桶

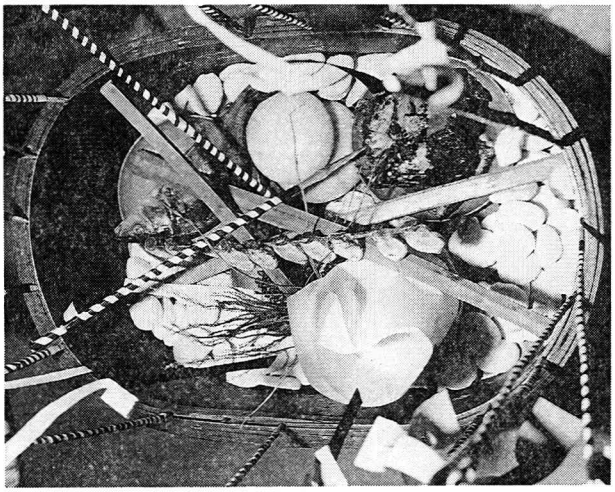

写真11　野里住吉神社の夏越桶

や小さい口径の楕円形の側が載った形になっている。このとき，底板が側板よりはみ出す部分は，短径側は少なく，長径側は大きくなっている。もちろん底板と側板は6カ所で綴じつけられている。

こうした形状の楕円形曲物は，出土遺物では伊場遺跡や藤原宮跡のものに顕著にみられる。伊場遺跡出土品のなかで楕円形曲物は7点見られる[30]が，大きいものでは最大長82センチ，内法長64.1センチあり，小さいものでも最大長62センチと比較的大きく，野里住吉神社の夏越桶と同じような大きさである。そのうち大きいもの4点は長径の両端に把手がついている。これらは当然に底板が側板よりはみ出す部分が，短径側は少なく，長径側は大きくなっているが，把手のないものもまったく同じである。藤原宮跡出土の楕円形曲物も比較的大きなもので，伊場遺跡出土のもの[31]と同じ形状である。

東京都港区の芝神明の例祭に神社から授けられる「千木筥」は，表面にきれいな花模様を描いてい

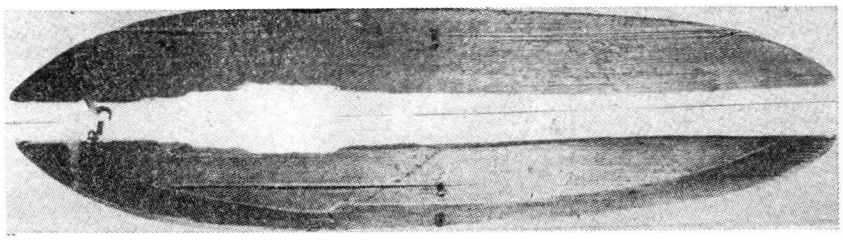

写真12　藤原宮跡出土曲物の底板

るところから，「絵櫃」とも呼ばれて親しまれている。これも楕円形曲物である。今日のものは底のついた曲物を三段重ね，その間に板を挟んだり，一重の絵櫃に板を載せたりしているが，その仕様からみて，もとは板の上に側板を載せ，また板を挟み，その上にまた側板を積み重ねる姿であったろうことが推察される。『石山寺縁起絵巻』の第3巻第2段，東三条院行啓逢坂を越える場の，見物人を描いたなかに荷を持った商人の姿がある。枷に長方形の曲物をとおした荷をおいて話しているが，この曲物は，下に曲物より大きな板を一枚敷き，その上に曲物を一つ，また板を一枚おいて曲物をおき，さらに上に板をのせて蓋をし，縛っている。ちょうど芝神明の千木筥と同じような組み方をしている。

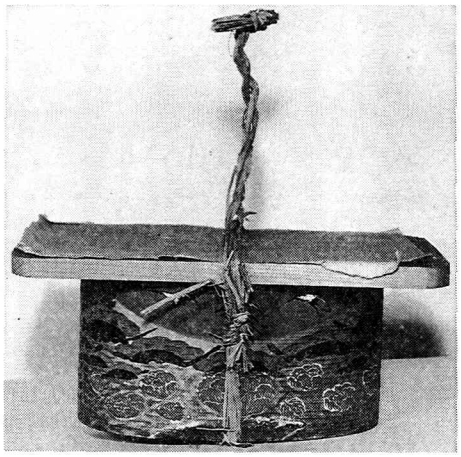

写真13　芝神明の絵櫃

神事やそれに用いる神器・祭具の類は古風を尊び，できるだけ原初の姿を伝承しようとする風があるゆえ，こうした祭具，ことに神饌の容器と，古代・中世の出土遺物とを関連づけて，曲物の形状，とくに側板と底板の組み合わせを考えてみると，はじめは平らな板の上に側板を載せただけのもの。つぎは底板を側板に沿うて，側板の口径より大きく円形あるいは楕円形に切り，隋所に孔をあけて紐や樹皮で側板と底板を綴じつけたもの。つぎに底板に側の内径にあたる部分を厚くし，側板の接する部分から外側を薄くし，底板に側板がよく納まるようにした，カキイレゾコに似た仕様のものへとかわり，そこから漸次進歩したものとなる過程をみることができる。

神饌調進に用いる容器で，大きなものは楕円形や長方形のものが多く，それらは底板の大きいのがよく見られる。側の口径が大きくなると，技術的にもまた堅牢性の面からもそうした形状になるのであろう。野里住吉神社の夏越桶のように底板の大きな曲物は，絵巻物のなかにもみることができる。『春日権現験記』の第1巻3段，藤原光弘竹林殿を造営する場で，大きな四角の曲物が見えるが，おそらく食事一切をこれに入れて運んできたのであろう。これは上下に幅広の廻しの側板が巻いてあり，底板は側より大きく四方にはみ出ている。第14巻第6段，京の大火に唯識論を安置した家が火災を免れた場の続きに，家の焼けあとに幕を張り，仮住いをしているところへ，女が食物を運んできている図がある。魚・飯・壺などを大きな長方形の曲物に入れて頭にいただいている。この曲物は側に3本の廻しの側板を巻いている。それは長方形の曲物としてはわりあいに深いので，廻しの側板を多くしているのだろう。また底板も側よりは大きく周囲にはみ出していて，さきのと同じ形である。おそらく神饌櫃にしても，また一般に使う曲物にしても，大形のものは底板を大きくして，その上に側板をとりつけた形状の

ものをながく用いたのではないかと思われる。またそれの方が強固であったはずである。

大型の曲物神饌櫃あるいは折敷は今日も各所に見られるが，奈良県桜井市三輪の大神神社の摂社で，奈良市本子守町の率川神社の，6月17日におこなわれる三枝祭りのときの神饌容器は，いろいろの形の曲物が用いられている。そのなかで，神前正面に据える御棚神饌櫃は，長方形の曲物である。いまは四隅を丸く曲げたものであるが，かつては長方形の隅を少し切った形で，八角形になるが，上下に廻しの側板がついており，また底板はやや側よりも大きくなっている。この形状の神饌櫃も各地に見られる。古く『年中行事絵巻』の第3巻第3段，庶民の斗鶏の場で，小祠に供え物をしているところがあるが，供物は壺と3つの曲物に入っている。これも3つとも浅い方形のもので，上の方に廻しの側板がある。第10巻第3段，今宮祭りの場の参詣人のなかに，円形曲物をいただいた女，方形曲物を抱えもつ男がいる。いずれも供え物を入れたもののようである。

『絵師草紙』第3段に，女が八脚の上に方形の曲物を載せたのをいただいた姿が描かれている。八脚は供物などを神に供えるときに用いるもので，この曲物は供物を入れたのであろう。上下に廻しの側板があり，上には布をかぶせている。この八脚に供物櫃をのせた情景は，三枝祭りのさいの神饌の献上とまったく同じである。

3. 仏教儀礼と曲物

平安時代の中期，ほぼ10世紀の終りごろ，仏教的作善行為の一つとして，経典を埋納する風が広まった。法華経などの経典を経筒に納めてそれを地中に埋め，上に盛り土をするのが一般的で，もっとも早い確実な例は，長徳4年(998)の奥書がある藤原道長納経の『法華経』などと，それらを納めた寛弘4年（1007）在銘の金銅製円筒経筒が埋納された，奈良県金峯山経塚である。その後11世紀後半から12世紀全般にかけて，経塚営造の最盛期を迎え，遺物にもすぐれたものが多い。こうした経塚遺物の中にも曲物容器がある。その一例が高野山奥之院出土の経塚遺物で，

天永四年癸巳

五月三日午壬

比丘尼法楽

奉書寫矣

の銘文を鋳出する鋳銅経筒と陶製経外容器と漆塗木製内容器を1組とするものである。[32] このうち漆塗木製内容器なるものが曲物で総高31.0センチ，身高17.5センチ，身経13.2センチのもので身と蓋に分かれたものである。

こうした曲物製経筒内容器は以後しばしば見ることができる。嘉禎2年（1236）の『如法経

現修法記』の「如法経筒奉納次第」には「或又用竹筒」云々とあり[33]，正嘉元年（1257）の『如法経手記』の「結願作法」の項には「次金銅筒奉納之，但近来檜物桶奉納之」云々という記事が一例としてあげられる[34]。こうしたところから見ると，13世紀中葉には埋経容器として，竹筒とともに檜物製曲物が用いられ一般化したことがうかがえるのである。

仏教教団で，半月ごとに互いに自己の罪過を懺悔する儀式がおこなわれるが，それを布薩という。まず心身を浄めるために，水瓶の水をもって，盥の上で手を洗い，手拭掛の白布で手を拭い，僧侶が参集着座ののち，人数を調べるため筹（ちう）を配り，それを集めて人数を確認してはじめて布薩がおこなわれる。この水瓶・盥・手拭掛・筹の四具が布薩具であるが，布薩盥もまた曲物を用いた例が多い。確実に布薩盥とされる盥は法隆寺にあり，「奉施入，法隆寺大講堂，自恣布薩手洗也，建武五年戊寅六月日　僧湛乗」という朱漆銘が裏面にある。2口あるが1口は口径25.9～26.3センチ，高さ6.1センチで，もう1口もほぼ同じ大きさである。内側は朱漆塗り，側面から底面は黒漆塗りで，上下に大小1組，中央には2本1組の箍をはめている。箍をはめているが，本体は曲物製である。東大寺にも3口の布薩盥があり，底面に「応永三十四年丁未　東大寺戒壇院布薩盥　七月廿七日」の銘があり，法隆寺の布薩盥に次ぐ古い布薩盥である。3口の内1口は板を縦に合わせて輪とし箍をはめた桶作りであるが，2口はこれも2本の箍をはめているが，桧の曲物製である。その内1口は口径31.0センチ，高さ9.7センチ，もう1口は口径29.2センチ，高さ9.0センチで，ともに縁を黒漆で，内部と側面を朱漆で塗って仕上げている。ほかにも奈良の寺院にはいくつか伝わり，その1つで室町時代のものに，口径33.5センチ，高さ3.5センチという浅い盥がある。側板は三条の条帯をめぐらし，木釘でとめたものである。

閼伽桶もまた重要な仏具である。『倭名類聚抄』では，仏塔具・伽藍具・僧坊具にわけて，伽藍具として「宝幢（ほうとう）　幡（ばん）　蓋（かい）　花鬘（けまん）　鐘（しょう）　金鼓（ごんぐ）　磬（けい）　奩（はこ）　火舎（かしゃ）　閼伽（あか）　灯明（とうみょう）　高座（こうざ）」と，多種の道具のなかに閼伽をあげている[35]。閼伽というのはもともと供養・功徳という意であるが，仏や貴賓に供える物をさし，のちにその容器あるいはその内容物である浄水・香水をさすようになった。したがって，仏に供える閼伽（浄水・香水）を汲み入れる桶を閼伽桶といった。この桶もまた多く曲物が用いられた。これで井戸から水を汲んできて，いったん閼伽棚において，のち6器の閼伽器に盛るのである。だから仏堂や書院の一隅の特定の場所に閼伽棚を設けて，そこに置かれるのが普通であった。

『親鸞上人絵伝』第2巻の書院の場で，濡縁のそばに閼伽桶がある。閼伽台にのった曲物桶で，水桶と同じものらしい。『法然上人絵伝』は第1巻第1段，法然が比叡山黒谷に隠遁して法華三昧を行じているところへ普賢菩薩があらわれた場で，像に盆石・水瓶が並び，外には閼伽桶の台が立ち，その上に曲物の閼伽桶がのせられている。この桶は上下にごく細い廻しの側板がはまっている。第14巻第4段は法然の説に感動した顕真が勝林寺に五坊を建て一向称名を

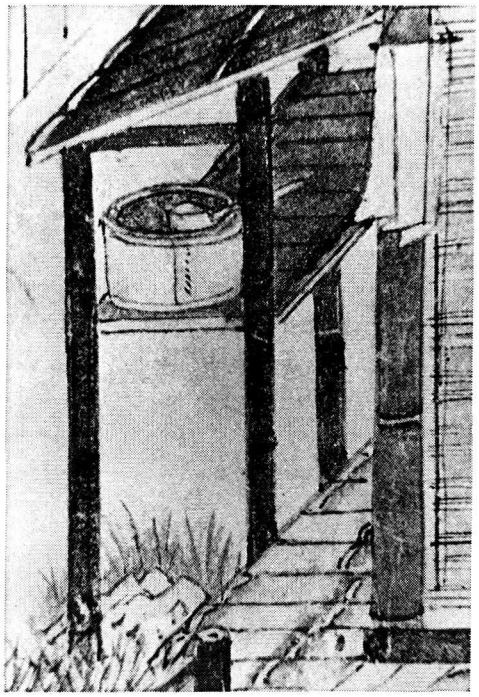

写真14　『幕帰絵詞』第8巻第2段に描かれた閼伽棚と閼伽桶

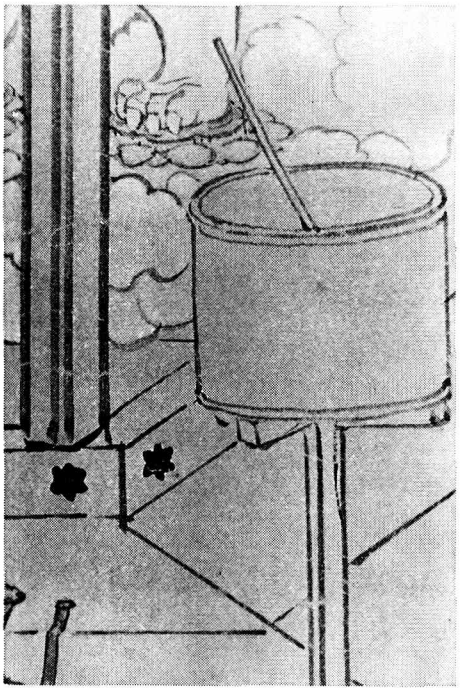

写真15　「親鸞上人絵伝」第2巻に描かれた閼伽台と閼伽桶

相続した場であるが，その坊の縁に閼伽桶が見られる。やはり円形の曲物であるがこれには廻しの側板がはまっていない。第19巻第4段，丹後弥勒寺の和尚仁和寺の尼の往来を夢見る場で，坊の縁先に閼伽桶が見られる。やはり円形の曲物でこれにも廻しの側板はない。

『春日権現験記絵』第14巻第1段，怪火に天台止観の抄物焼け失せたが唯真論のみ残る場で，堂の縁に閼伽桶がみられる。いままでの例と同形同大のものである。『絵師草紙』第1段の，絵師の家の厨子棚には，上段に巻紙・折紙・刷毛，中段に塗の箱が2つおかれ，下段に木鉢・水瓶とならんで曲物をおいていて，縁先には台木にのった閼伽桶が見える。これは下の方だけ廻しの側板をはめている。

『十二類合戦絵巻』下巻第5段，花乗房西山の草庵に移り住む場で，草庵の閼伽桶に上下に廻しの側板のはまった閼伽桶が見える。中世において閼伽桶はどこでも共通した形のものであったらしい。『慕帰絵詞』第8巻第2段覚如の竹丈庵の情景でも，坊の裏に閼伽棚がつくられ，そこに曲物の閼伽桶がおかれている。この曲物は細い廻しの側板がある。第9巻第3段，西山の久遠寺の妻善昭尼の墓に詣でた場の，庵の縁にやはり閼伽棚があり，円形の曲物桶だけが棚にのっている。

かように中世の絵巻物の中には，閼伽桶の使用例が多く描かれている。こうした状況は近世以降においても同じであったろう。近世の修験道における山伏の入峯にも閼伽桶が使われた。入峯の宿々において，新客と称するはじめての入峯者は，毎日三荷の閼伽水を汲まねばならず，これを修行の第一とされた。これは三時供養法の花水で，一荷汲んでくるたびに「案内案内閼

伽水の案内」と叫んで案内を乞う。その日の当番助番の衆がその声を聞くと「承る」と答えて閼伽桶を受け取る。こうして三荷終ると閼伽札をもって閼伽先達に渡し，閼伽桶を閼伽檀の上に置くのである。この閼伽桶もまた曲物であった。

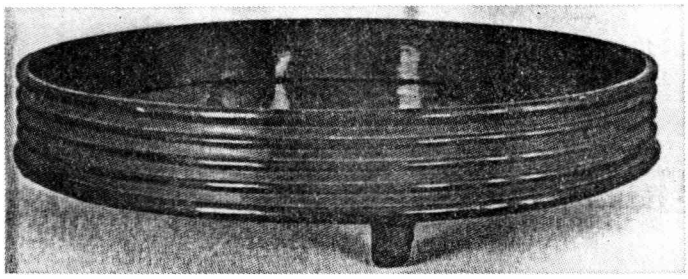

写真16　相国寺の浄菜大盆

禅宗寺院で供茶接待に用いられる盆を浄菜盆という。京都の相国寺に伝わる曲物浄菜大盆は，室町時代の作で，高さ2.5センチ，径54センチの大きさで，いたって扁平な形状をしていて，これは何段にも積み重ねるようになっている。側板は桐材を用いていて，装飾を兼ねて5条の帯をめぐらし，底板には猫脚型の3本の桟をとりつけ，補強も考慮している。簡素な形態のうちにも素朴な美しさがにじみでている。普通は5段重ねになるもので，外側が朱漆塗のものと黒漆塗のものとがある。

おわりに

以上，神事・仏事に用いられる神具・祭具ならびに仏具の各種類をあげ，その用法を見たとき，きわめて多様に用いられてきたことが明らかである。また形態・仕様・意匠についても多様であるが，現行顕在のものだけをもって比較考察しても，曲物の様式的変遷はほぼ明らかになるが，出土遺物や文献資料・絵画資料その他の資料を合わせて総合的に検討を加えていくと，より明白になってくることがわかる。

その結果，曲物は今日の面桶をはじめとする曲物容器のように，底板が側板の内部に収まって固定されたものではなく，当初は平らな板の上に側板を載せただけのものであったことが明らかである。そしてつぎに底板を側板の口径より大きく切り，それに側板を載せ，側板が動かぬように，随所に孔をあけて紐や樹皮で側板を底板に固定したものになり，そこから底板の側板の内径にあたる部分を厚くし，側板の接する部分から外側を薄くし，底板が側によく収まりより固定する仕様のものになってくる。さらに底板が側板の外径に添って裁断されたものになり，最後に底板が側板の中に収まった今日の仕様になる過程が明らかになり，曲物の様式的編年・変遷を知ることができる。

註

（1）岩井宏實「曲物について」『風俗』第９巻第２号　日本風俗史学会　昭和45年４月　１～19頁
（2）岩井宏實「曲物の用途」『大阪市立博物館研究紀要』第10冊　大阪市立博物館　昭和53年３月　１～32頁
（3）岩井宏實「紡織と曲物―苧桶・糸車・枠・腰当―」『民具マンスリー』第24巻第５号　神奈川大学日本常民文化研究所　平成３年７月　１～５頁
（4）岩井宏實「飲食用具としての曲物」『木と民具』日本民具学会論集４　日本民具学会・雄山閣　平成２年10月　７～22頁
岩井宏實「水をめぐる生活と曲物―井戸・釣瓶・水桶・柄杓・水車―」『民具研究』第83号　日本民具学会　平成元年９月　１～15頁
（5）岩井宏實「絵巻物に見る運搬具としての曲物」『古画類聚』（古画類聚に関する調査研究報告）本文篇　東京国立博物館・毎日新聞社　平成２年５月　122～125頁
（6）岩井宏實「祭りと容器」『月刊文化財』232号　文化庁文化財保護部　昭和58年１月　10～17頁
岩井宏實「霊の器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集　国立歴史民俗博物館　平成元年３月　１～11頁
（7）岩井宏實「茶の湯と曲物」『近畿民具』第14号　近畿民具学会　平成３年３月　50～51頁
（8）『大神宮儀式解』(大神宮叢書)前篇　神宮司庁篇　巻第８　新宮造奉時行事用物・造奉物　319～320頁
（9）『新訂増補・国史大系』交替式・弘仁式・延喜式前篇　吉川弘文館　昭和52年　84頁
（10）『群書類従』第１輯神祇部　巻第１　皇太神宮儀式帳　続群書類従完成会　昭和４年　９頁
（11）本山桂川『日本民俗図誌』第１冊　祭礼篇　東京堂　昭和17年　３頁
（12）佐伯有義校訂『神道名目類聚抄』祭器部　３巻　大岡山書店　昭和９年　91頁
（13）『新訂増補故実叢書・貞文雑記』巻之７　膳部之部　明治図書出版・吉川弘文館　昭和27年　249～250頁
（14）『国史大系』第13巻　延喜式　経済雑誌社　明治33年　1043頁　『日本古典文学全集』延喜式第５　日本古典文学全集刊行会　昭和48年　209頁
（15）『覆刻日本古典全集』江家次第　現代思潮社　昭和53年　109～110頁
（16）『群書類従』第19輯　続群書類従完成会　昭和14年　761頁
（17）『大日本古記録』御堂関白記上　岩波書店　昭和27年　278頁
（18）『群書類従』第19輯　続群書類従完成会　昭和14年　761頁
（19）『新訂増補国史大系』28　政事要略　吉川弘文館　昭和39年
（20）伊場遺跡発掘調査報告書　第３冊『伊場遺跡遺物編Ⅰ』　浜松市教育委員会　昭和53年　21～23頁
（21）『日本古典文学大系』67　日本書紀上　岩波書店　昭和42年　206・207頁
（22）同上
（23）『日本随筆大成』巻７　吉川弘文館　昭和２年　435頁
（24）同上
（25）『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅱ』　奈良国立文化財研究所　昭和53年　72～74頁
（26）『平城宮跡発掘調査報告書Ⅵ』　奈良国立文化財研究所　昭和50年　87頁
（27）奥田真栄「武蔵国江ケ崎館址発見の井戸と木器」『歴史考古』４号
中村俊亀智「文部省史料館所蔵生活用具の研究（３）」『文部省史料館研究紀要』第４号　文部省史料館　昭和46年　177頁
（28）伊場遺跡発掘調査報告書第３冊『伊場遺跡遺物編Ⅰ』　浜松市教育委員会　昭和53年　21～23頁
（29）『下曽賀遺跡出土遺物』　国学院大学考古学資料室　昭和48年　29～30頁
（30）伊場遺跡発掘調査報告書第３冊『伊場遺跡遺物編Ⅰ』　浜松市教育委員会　昭和53年　21～23頁
（31）伊達宗泰ほか『藤原宮跡』　奈良県教育委員会　昭和44年　67頁
（32）巽三郎「天永四年在銘経筒出土状況」『高野山奥之院の地宝―高野山奥之院埋蔵文化財綜合調査報告書』和歌山県教育委員会・高野山文化財保存会　昭和50年　104・105・112頁
（33）『大正新修大蔵経』84　大正新修大蔵経刊行会　昭和38年　894頁
（34）『続群書類従』26輯上　釈家部　続群書類従完成会　大正14年　217頁
（35）『日本古典全集』倭名類聚抄　現代思潮社　昭和53年　巻18　３～５頁

（国立歴史民俗博物館　民俗研究部）

Shinto and Buddhist Ceremonies and Round Chip Vessels
——Fragment of a Folk Craft Study on Round Chip Vessels——

IWAI Hiromi

The round chip vessel is a type of wooden receptacle, together with the hollowed vessel, turned vessel, sectional vessel, tied vessel, and so on. Its wide range of applications extends from clothing, food, housing, industry, and transportation, to ceremonies in daily life and religious life; in other words, it has been widely used in all aspects of human life. Various sizes of round or oval chip receptacles were used as early as the Asuka and Fujiwara periods. In the Nara period, square or rectangular receptacles appeared. Thus, there are many examples of its usage in the Ancient times.

Tied vessels such as pails or barrels, which are wide-spread today, appeared from the later Kamakura to the early Muromachi periods; but it was in the Early Modern period that they actually became widely used in the everyday life of the common people. Therefore, pails before the Early Modern Period can all be considered as round chip vessels.

These round chip vessels were much used in Shinto and Buddhist ceremonies as well. Shinto ritualistic implements include *Mihishiro*, *Honō Kagami Bako* (mirror boxes), *Hioke* (fire pails), *Imioke*, *Sanbō* (offeratory stands), *Oshiki* (plates), *Oribitsu* (boxes), *Hokai*, and other various types of receptacles for food and wine offered to the gods. Buddhist ritualistic implements include *Kyōzutsunaiyōki* (cylindrical cases for sutras), *Fusatsu Tarai Akaoke* (water pails), *Jyōsaibov* (trays for vegetables), and other various cases for Buddhist implements. Since there is a tendency in Shinto or Buddhist rites to respect the ancient manner and to hand down the original styles, many of the Shinto or Buddhist implements used for these rites retain their ancient usages and shapes.

Therefore, while studying the existing round chip receptables, excavated articles and materials seen in philological documents or picture scrolls were investigated to clarify the stylistic transition of round chip receptables, as a result of which, the following process came to light. 1) At first, the bottom board was not fixed, but the side board was put on a flat bottom board. 2) Then, the bottom board was cut larger than the

side board, and holes were pierced at appropriate positions for stitching the side board together with the bottom board, using a cord or bark string. 3) The bottom board was made thicker in the part where it touched the inner diameter of the side board, and the outside of the side board was thinned starting from where it touched the bottom board, so that the bottom board would fit well to the side board. This is similar to the specification for *Kakiirezoko*. 4) Finally, the round chip receptables were improved into the form we see today.